

# お正月さんがやってくる(2)

二人のおばあちゃんの会話より

はる・みつ



カット・佐藤和代

はる こうしてお正月さんがやってきたんですね。

みつ 一夜明けるとね、気分も変わってね。何もかもが新しく、清しく、一つ年齢を重ねて数えあったものだよ。一つ年齢をとることがお正月の嬉しさでもあったのかもしれないねえ。お父さん、お母さんも遊んでくれるから、お正月は嬉しかった……準備した晴着を着せてもらって、たこやお手玉を作ってもらって遊んだね。たこやお手玉の材料も、全部家の中にあるものだから、お兄さんやお姉さんが教えてくれたもんだ。

そうそう、お手玉を自分で作れるようになってから、兄さにすぐく叱られたことがあったよ。それはね、お手玉の中に「お米」を入れて作ったんだね。自分で作ったもんだから、自慢したくなってね、兄さ達若い衆の集まっている所へ持って行って遊んだんだ。そうしたら、よりによって、中からお米がこぼれてね。それを見た兄さの剣幕といったらなかったよ。それはもう怒られた。「虫くいあずきを入れる。大事なお米を入れて遊ぶとは何ごとだ！」って訳だ。そりゃ

もうすごい怒り方で、おっかさんの所へ逃げてったけど、その時はかばってくれなかったよ。「お前が悪いんだから謝りなさい」って言われたね。

はる お米をいかに大切にしたかが伝わってきます。あずきも虫くいを入れたのねえ。

みつ ハハハ…そうだったねえ。お正月といえば、子どもにとっては何といっても「お年玉」。そりゃもう、お金を手にするのはお正月ぐらいなんだから、大はしゃぎだね。大人だって自給自足の生活で、お金とは関わらないで生活してるんだからね。金額？　そう、五銭、穴のあいた五銭だったね。いろんな所からお年玉に五銭をもらって、糸輪に通して首から下げて、大喜びで遊んで、遊んでるうちになくて、しかられて…毎年そうだったように思うよ。よくもまあ、懲りもせず…嬉しかったんだねえ。そうそう、時々、五十銭なんて穴のあいてないお年玉をもらった時もあったけど、母親が「穴のあいたお金にとりかえてあげる」って、持ってたきり、返ってこない時も

あったよ。ハハハ……。

一月三日、四日になると、親類やらご近所への年始回りで村の人どおりが賑やかになるのよ。姑さんの年始回り、嫁さんの年始回り、姑と仲の良い嫁さんは、一緒に年始回り。男の人？　男の人達は酒飲んでたね。夫婦仲の良い所は、夫婦で塩釜神社（子宝・安産祈願の神社）へお参りに行ったりね、どこの夫婦が仲が良い、嫁姑の仲が良いって、子どもの目からもすぐにわかったもんだよ。

そうそう、四日はね、前の年に結婚した初嫁さんだけが、だんなさんと揃って、実家へ帰るのよ。もう嬉しそうで、嬉しそうで、まりみたいに弾んで見えたもんだった……。初めて、実家に帰るんだものね。でもね、実家で、七日の七草粥を食べてくる嫁さんは、ばか嫁さんていわれてね。嫁さんも（嫁ぎ先へは）帰りにたくないし、親御さんも帰したくなかっただろうにねえ。ばか嫁さんなんて言われるのは誰でもいやだものねえ。昔だから嫁ぎ先に楽しい事なんかないんだよ。

古嫁さんは、小正月十五日に一、二晩、実家へ帰ったね。冬の三か月間、野良仕事はなくても、嫁さん達は、針仕事だなんだっていくらでも仕事があったもんね。男の人は、冬はお酒飲んでたけどね――。

はる 三箇日の間に、お客様は多いのかしら。

みつ お客さんは必ずあったよ。子どもはお年玉目当てで、お客さんを楽しみにしたし、遊んでももらえたしね。

親戚に新嫁さんがいれば、若夫婦を呼んで、他にも、親戚やら、仲の良い嫁さん同士やら、賑やかに往き来したもんだよ。御馳走も楽しみだし、かるたなどで、大人も遊んでたね。百人一首もたまにしたかねえ……。子どもは外で、あやとり、羽子板――これも手作り――まりつき、たこあげ、こま回し……。平和だったねえ。

はる うちでは、かるたとり、双六をよくしたわね。兄弟四人でよく遊んだね。私は末っ子だったから、みんなから本当に可愛がってもらって、よく勝たせても

らった……。羽子板、たこは、買ってもらったわね。買いに行くのがまた楽しみだね。大人達、兄達が、百人一首をしてるのを見て、覚えるでしょう。仲間に入れてもらいたくて、覚えてたわね。

私は、お正月は、お寿司を食べに連れていってもらうのと、勿論、お年玉が楽しみだった。

そう、獅子舞が来たでしょう。いつも不思議に思ってたんだけど、あの人達はどこの誰なんだろうって。

家の人達も不思議がついていたわね。子ども達は勿論、恐ろしくて嫌だったし、私の母も、縁起物だから断れないし、誰かわからない人が家にながってくるんだから、それに、子どもは泣くし、とつても嫌がって、戸に鍵をかけちゃうんだけど、必ずやって来て、鍵を開けざるを得なかったようよ。早く御布施を受けとって、次の家へ行つてほしいんだけど、舞って、子どもの頭をくわえこんで、子どもを泣かせて、見ている大人達は笑って……。厄除け、縁起物だからと言われて、釈然としなかったのを覚えてるわ。神社の神主さ

んが、お札を売りに来たのも覚えてるわ。母は、これも断れないって愚痴ってたっけ。

お正月になると、姉やさんや、小僧さんに映画に連れていってもらうのも楽しかった。お正月映画はいつも満員だったのよ。街は人が多くて、気分が高揚して、一度なんか、下の兄が迷子になって、一人で上野から駒込まで帰っちゃってねえ、姉やさんが真っ青になって探して大さわぎしたのを覚えてるわ。あの頃の子どもは、一人で一時間位歩くのなんて、何とも思ってたなかったのね。お正月の街を歩くのって、ちょっとした冒険で、本人は楽しかったようよ。髪結いさんの所もすごい熱気で、母や姉についていきたがったわね。

みつ 三箇日が過ぎると、四日のところって言ってね、四日にはとろろを食べて、玄関に厄除けでタラータラーとまいておくのよ。

十四日に、もう一度お餅をついて、囲炉裏の上の繭玉をとりかえるんだよ。十四日の繭玉は、水木の木の

枝にさすのよ。真直ぐで素性の良い木でね。孫の名を“みずき”にしたと聞いた時は、いい名だと、大喜びしたもんだ。お正月さんを迎えた繭玉は、干してあられにして、私達のおやつになった。

その夜に、他の注連飾りも、全部、その家の主人が唱えながら集めて、神社へ持って行って焼いて、お正月さんを送るんだよ。

何て唱えるかって？——何ともいえん唱えじゃったなあ。

ヤ——へヨへヨホホ——  
(正しく表せない)

アハハハ 字にはならんでしよう。

ヤ——へヨへヨ——ホホ——。

——終——